

令和4年度 総合型選抜（AO型選抜）入試採点基準

解答例

問題1

漁獲量と単価はそれぞれ、マイワシの場合、約3万トンから約56万トンに増加し、約220円から約40円へ低下した。サバ類の場合、約40万トンから約65万トンの間で推移し、約50円から約110円へ上昇した。サンマの場合、2008年の約35万トンをピークに約4万5千トンへ減少し、約65円から約480円へ上昇した。スルメイカの場合、約22万トンから約4万トンに減少し、約250円から約570円へ上昇した。このように、マイワシ、サンマ、スルメイカの場合は漁獲量と単価との間に負の相関がみられた。一方サバ類の場合、漁獲量は横ばい傾向にあったが、単価は上昇し、相関はみられなかった。(284文字)

※採点のポイント：4魚種すべてについて漁獲量と単価の推移について、適切に記述されていること。推移のパターンが大きく2つであることに触れられていること（負の相関のあるものと相関のないもの）。

問題2

設問2-1

平成10年では59歳まで摂取量は増加して60歳以上で減少している。平成15年および平成20年では69歳まで増加して70歳以上で減少する傾向が見られる。一方、平成25年および平成30年を見ると、7歳から49歳までは摂取量がほとんど変わらない。これらの調査年では、50歳以上になってようやく摂取量の増加が確認され、70歳以上でも摂取量は大きく減少していない。(177文字)

※採点のポイント：消費量の増加・減少の傾向が年齢階層別に説明されていること。また、調査年によって増加・減少の傾向が異なることに言及していること。

設問2-2

年齢7歳の魚介類消費量は平成10年と平成20年でほとんど変化しておらず、平成30年に減少傾向を示している。一方、平成10年における年齢40歳の魚介類摂取量は平成20年から平成30年にかけて直線的に減少している。(105文字)

※採点のポイント：調査対象者の年齢は調査年が進む毎に次の年に加入することに留意していること。平成10年に2つの年齢階層に属していた調査対象者の摂取量変化の傾向を説明していること。